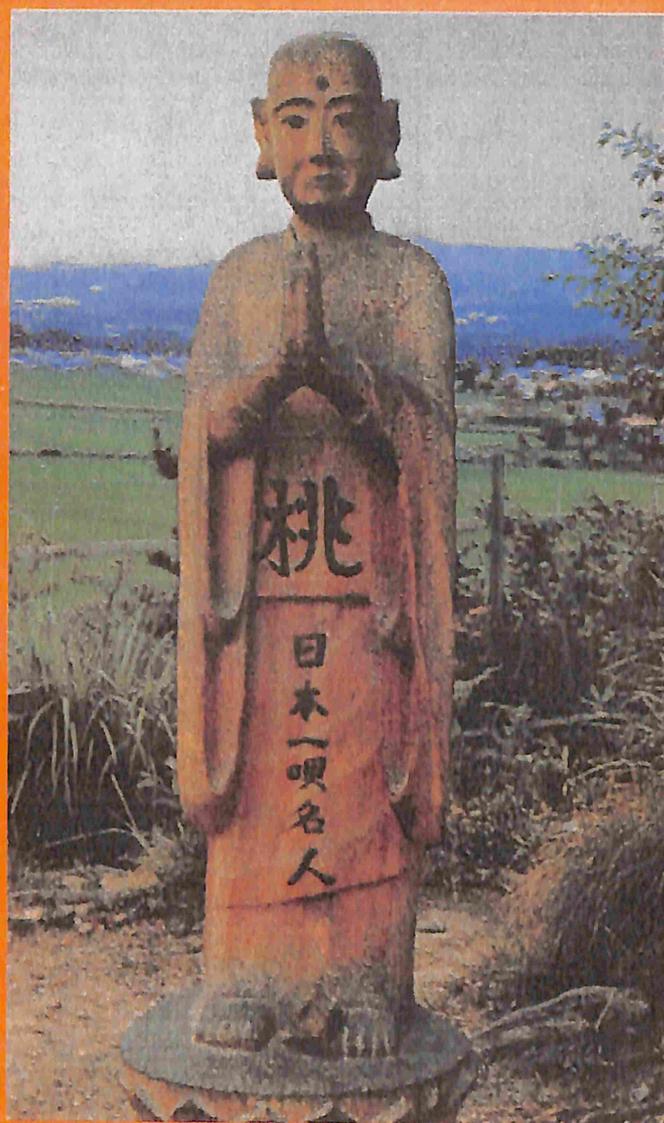
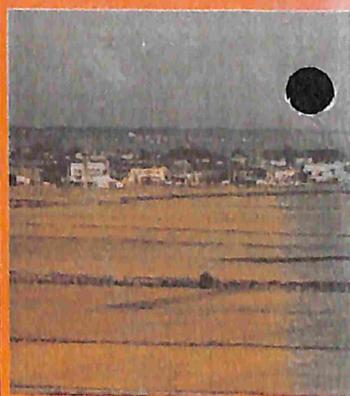


ふるさとの
かたりべ

第三集



◀ 津軽民謡の祖 黒川桃太郎こと 桃地蔵



発行 嘉瀬ふるさとを探る会

吉野の

かたきん

津軽民謡の元祖

黒川桃太郎氏



権現崎宣伝に終生した

小山内嘉七郎(漫遊)氏



写真提供

黒川桃太郎(吉崎忠直氏)
小山内嘉七郎(小山内嘉一郎氏)

嘉瀬の桃

嘉瀬の桃だバ 女郎買い好きだ

それは冗談だ 酒ばり好きだ

それも冗談だ ボタモチ好きだ

津軽民謡の元祖と言われた「嘉瀬の桃」こと黒川桃太郎が好んで歌う歌詞だと「嘉瀬の桃」を全国に紹介した本県出身の直木賞作家長部日出雄氏が『津軽世去れ節』の中に書いている。

明治十九年七月十八日生れの黒川桃太郎について、出生地の嘉瀬でも知る人は少なくなった。それは、「桃」の親類、縁者が現在嘉瀬には一人も居ないのが理由の一つかも知れない。

黒川桃太郎は、北津軽郡嘉瀬村大字嘉瀬八十七番戸に父黒川太郎（安政二年十月十四日生）、母里さこ（安政六年六月十二日生）の二男として生まれた。

黒川太郎には、長男太市郎（明治十四年二月七日生）、長女たよ（明治十五年四月三十日生）、三男桃吉（明治二十二年五月二十日生）、四男末吉（明治二十五年十一月四日生）、二女たみ（明治二十八年六月七日生）の六人の子があるが、長男太市郎の相続人である長女リエ（明治四十年三月十一日生）は結

婚して青森市に住み、三男の桃吉は同村内海徳太郎の二女と婚姻したが、大正十四年北海道に転籍、四男の末吉も昭和五年に北海道大江村へ分家、末娘のたみは隣村の金木字沢部一八三番高松奥三郎と結婚したが、昭和九年北海道函館市へ転籍している。

わがふるさと嘉瀬で「桃」のことは知らなくても

「いまの世の中 世はさかさまで

嘉瀬と金木間の川コ 石コ流れて

木の葉コ沈む

の歌は、冒頭の歌とともに、うたい継がれている。

「嘉瀬の奴踊り」の歌としていまは全国的に有名になったが大正の初めごろ『いまの世の中、世はさかさまで』と、桃が奴踊り歌の枕言葉に即興的にうたい込んでいることを継承しているのは、嘉瀬だけのうたい方であろう。

その桃は、明治四十四年二月二十四日嘉瀬村大字嘉瀬字雲雀野二百十番地ノ内三号に分家し、大工をしていたが、大工としての残した建築物は無いと聞いている。（註、桃と同年代大工

をしていた筆者の亡父から聞く) 桃は、歌いコとしての才能が
抜群で、大工仕事に身が入らなかつた為であろう。

昭和六年一月二十日午前九時、青森県大字古川字美法三十五
番地に於て死亡、全居者藤森兼五郎届出、全月二十一日青森市
長北山一郎受付全年二月五日送付。と原戸籍簿には記載されて
いる。

酒とバクチに溺れ、最後は身内の者にも看取られず、淋しく
命を燃え尽した「嘉瀬の桃」を、津軽民謡の元祖として、何時
までも人々の記憶に残したい。と発願したのは、桃よりも十才
年下の同村字雲雀野二七六番地小山内漫遊(本名嘉七郎)氏で

ある。

漫遊氏は「桃」への追憶を込め、村人の義金を募りながら、
同郷の大工喜良市に住む、小山内晴夫氏に『桃地蔵』の製作を
依頼し、昭和二十二年夏、桃が在村時唄の練習をした村はずれ
の観音山の観音堂へ木像を安置したのである。

くしくも、堂守をしながら、日夜『桃地蔵』の供養をしてい
た漫遊氏は、昭和十三年三月二十日(推定)午後一時、観音堂
内桃地蔵前で、これまた、誰にも看取られることなくこの世を
去っている。

黒川桃太郎戸籍原簿

山 中 正 津 記

歴史的地方の時代



金木町長 古川竹夫

ある書物で「歴史的地方の時代」というの
を読んだことがあります。平たく言えば、行
政と地域住民が力を合わせて、郷土の歴史や

文化、民俗を再発見し、手厚く保護しようと
いうものです。昭和五十二年四月、同好の諸

氏が相集い、ふるさとの姿を掘り起して、遺
跡や文化財を保護、記録などを収集し、後世

に伝えようという目的で『嘉瀬
ふるさとを探る会』が発足した

と聞かされておりますが、まさ
しく歴史的地方の時代の意に適

うものであります。

私も、生かじりながら、郷土

史に興味をもっておりますが、わが町には名

所旧跡が数多く散在し、文化財や素朴な民俗

も沢山あります。ことに、嘉瀬地域には、東

切まつわる「イコグ穴」伝説や、かの有名な

「嘉瀬の奴踊り」。嘉瀬の桃こと、黒川桃太

郎など輩出し、さらに『俳句』や『短歌』

も、今なお、盛んな土地がらで、これら史跡

や文化財は一地域にとどまらず、わが町の貴
重な財産で、その存在価値は、計り知れない
ものがあります。

これからも、調査研究を続け、これらを合
わせて後世に伝承することは、私どもに課せ

られた責務であり、さらに『嘉瀬ふるさとを
探る会』の会員諸氏の活躍に期待するところ

も大きいのであります。従来、

これら文化財に対する行政の停

滞を払拭できないことも事実で

したが、文化財に対する重要性

を再考するとともに、文化サー

クルの育成にも充分意を注がな

ければと思っております。

ここに『嘉瀬ふるさとを探る会』の会員諸

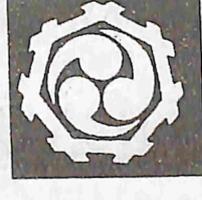
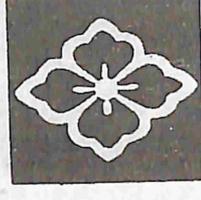
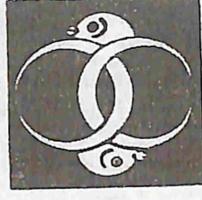
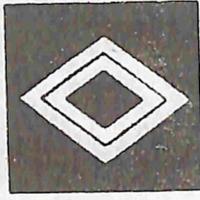
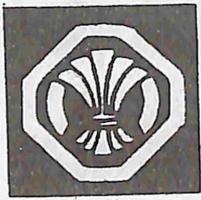
氏の長期にわたる地道な調査研究、集録など、

たゆまざる努力の結晶が報いられ、その集大

成を『かたりべ』第三集として刊行されまし

たことは、誠に喜ばしい限りです。





かたりべ 第三集 目次

表紙 桃地蔵

表紙解説 嘉瀬の桃

巻頭言 歴史的な地方の時代

金木町長 古川竹夫 (3)

田書成真ト 利村木 = 藤清画 企写カ = 町田企写カ = 金吉一 = 木範一 = 字師清下 = 題書木

蔵地 14

ねふた考 18

稻荷神社 25

- 古文書
- ① 伊勢参宮寺請證文 (67)
 - ② 弁慶の借用證 (95)
 - ③ 出国寺請證文 (97)

かたりべ随想

小栗崎	伊藤定四郎 (6)
綱引き	小山内嘉一郎 (7)
雨乞い	木下俊蔵 (8)
蛇体穴異聞	原田正信 (9)
風俗習慣のおこり	沢田政孝 (10)
移り変り	木立久二 (11)

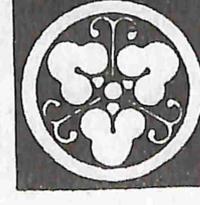
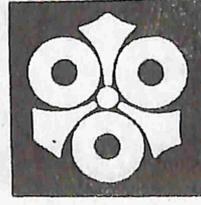
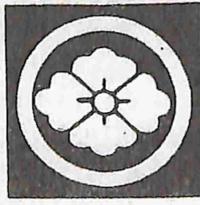
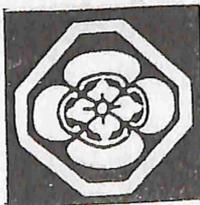
ふるさとを探る 山中正津 (22)

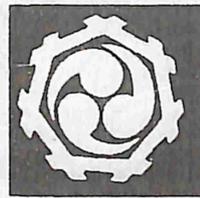
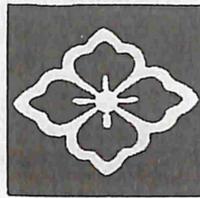
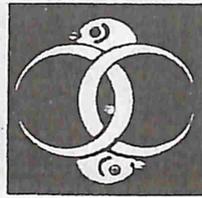
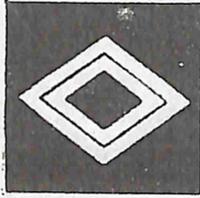
藪眺み余聞 秋元惣之進 (42)

遊びの回想 原田万治 (48)

嘉瀬文人の源流 俳人の流れとその人脈 沢田薫 (26)

イタコ・ゴミソは 津軽のかたりべではなかったか? 山中長三郎 (20)





特集 紙上討論ゼミナール……嘉瀬の語源

特別読物 親潮の流れ

農民生活記録

山のことあれこれ

柿本人麻呂の伝記

メモ帳 = 北海道と津軽

① 渡 党(シャモ和人)……………	(30)
② 羊啼山に政所・ 極悪悲道の人種差別……………	(34)
③ 北海道侵略の始まり……………	(46)
(4) アイヌ追放……………	(56)
⑤ 海 流……………	(66)
⑥ 松前藩の始祖・ アイヌ蜂起……………	(88)
⑦ 流 刊 地……………	(94)

米価変動と

生産量……………

会員プロフィール……………

(96)

(89)

……………(36)

……………(74)

木村 治利……………(58)

須崎 正敏……………(32)

外崎 三千男……………(68)

殉難警察官吏之碑……………

(12)

ふるさと山野……………

(31)

忠 魂 碑……………

(47)

嘉瀬小学校……………

(73)

「かたりべ」への便り……………

(100)

赤鉛筆……………

(100)

印刷の窓……………

(100)

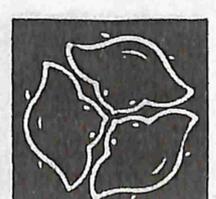
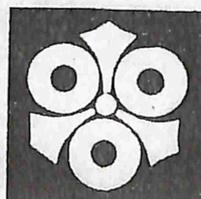
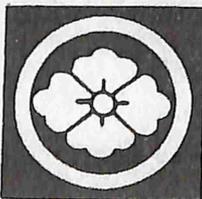
嘉瀬話

① 婿の樽座……………(35)

② 金九郎の鱒
鍛冶カガア寝言……………(57)

……………

……………



小栗崎

伊藤 定四郎



私が『嘉瀬ふるさとを探る会』に入
ったきっかけは、金木からの帰り嘉瀬
八幡宮の処に、『旧道路の跡』と書い
た標柱を見てからであった。

いったい誰が建てたのだらうかと調
べて見たら『嘉瀬ふるさとを探る会建

立』と書いてあった。これはよい会だ、自分もいろいろと考えている
事がある。その事を若い人達に伝えたいと思っていることがある。

大正・昭和と、時代の流れの移り変わりには何んと言ってよいかわか
らないと思います。昭和七年頃（今から五〇年前）ある雑誌に『科学
の進歩は人類の滅亡』と書いてあった。それが今の原子爆弾一個で何
百人の人が死んでしまう。そうならないうちに私達の、こどもの頃の
思い出を一つでもよいから『かたりべ』に書く。

私の家では、私のこどもの頃から長富に田を耕作していて、何時も
親に連れられて狐崎の果てまで働らくに行つたもんだ。今でも狐

崎の田を耕作していると、狐崎にも『いごく穴』跡があり、少し掘る
と五・六体の骨が出てくるときもあります。長富から狐崎、そして古
町・冷水を通って、小栗崎から喜良市へと旧道跡が今でも所々にあり
ます。飯詰より中柏木、そしてスキー場の山道を通って喜良市に行く
旧道もあります。

昔農家一戸毎に馬を一頭はかっていたもので、馬は農家の一員で生
活基盤の命の綱といってもよいくらい、馬は大切なものでした。居間
の傍に馬小屋があり、人と馬が一緒に暮らしていたもので、そして馬
の小便も馬ふんの臭いもちっともくさく感じなかった。朝と晩は、毎
日二回、川に馬体を洗いにいき、小栗崎に『馬ぶい』というふちがあ
った。

『なべ田』 古人の話によれば、老人クラブのある附近の田は、不
作の年でも、なべに米が入る良田であったから『鍋田』という名が付
けられたと云う。

小栗崎は嘉瀬より古く成立した村であると云われ、私の若い頃の盆
は、墓参りして夜八時半ごろになると、松川新八さんの道路附近が小栗
崎の盆踊り場となったもので、十時近くなると、親と若い娘が連れ立
って嘉瀬古町に踊りに行った。

小栗崎で古いものは稲荷神社にある一五〇年ぐらいたった杉の大木
ぐらいであろう。

綱引き

小山内 嘉一郎



一つの呼び水として書いて見る。

嘉瀬に子供が主催する綱引きがあった。当時の高等小学校（今の中学校）の生徒たちが主役であった。

私たち町内の子供は殆んど全員が出て綱作りをした。高等科の生徒二・三人に小学校の児童五・六人が、従って材料集めに町内を回った。

『綱コ作る縄けろであ』と、毎戸を訪問すると、町内の大人たちも大分前から知っていたとみえて『よぐ来たな、一把でいいだな』と言って、最低でも、『つけ縄一把』、多い人は二把、五把、一丸（十把も呉れたり、五ミリぐらいの太い針金だの、藤のつるを出し家もある）

った。

貰った縄は輪状になっているので、それに棒を通して、私たち一年生が二人で五把か十把かついで、古町は中村の所に集めた。縄集めは何組にも分れてやったので午前中に何百把も集った。

時期は春先であったから、卒業後の休日に綱作りをしたようであった。当時機械縄はなく、手になった縄ばかりで、一把の長さは七八メートルはあったでしょう。それを十本ぐらい合せてネジると一本の太い縄になる。それを更に十本も合せると、十五センチもある太い綱ができあがる。これを合せる際に、真中に針金や藤を入れて、切れないようにするのであった。

綱の先端には『さば口』と称する、直径一メートルもある、丸い輪を作る。これが綱の最っとも重要な部分であるから、中身に針金や藤を多く入れ、その上を縄で巻く。太さも二十センチ以上もあって、できあがった綱は、まるで大蛇のように見えた。この古町の綱に対する相手は、鍛冶町方面か、派立方面のものか、私にはわからないが、古町に優るとも劣らない頑丈な綱であった。

この綱引きは四月の始め頃と思われる。春風に浮かれて、日暮れ時になると、子供たちは総出で綱につかまり、町内を練り歩いた。

『綱コねーな、よいかげねーな、今夜の綱は大綱で、ジッコもパパも、みな出はれ』と 声を揃えて叫んだ。

こうして、一時間も回った後、会場である前町（今の毛内醤油店前）は原田酒造店前に集った。今の山福精肉商の所は白取湯屋であった。

湯上り客たちが、古町にも、派立にも何十人も加勢した。こうなる

と大人の綱引きといっても言い過ぎでないようであった。

綱の太さは十五センチ以上もあって、握ることが困難だから、三十センチ間かくぐらいに縄の手がけをつけた。

古町が勝ったり、派立が勝ったり、位置を代えたりして、最中力を入れていた時に、綱が無気味な音をたてて切れることがあった。これは引張って切れるより、相手側の誰かが、味方のように装って、マキリで綱を切るという不法者の仕業が多かったようだ。

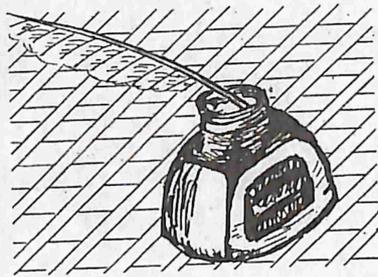
綱引きの周囲には何百人という見物人が集って盛んに声援をおくった。この綱引きは何時から始ったのか、私は伺ったこともないが、私に参加してからは、僅か二年で幕が閉じられたようである。

綱の残骸が二・三年、私の家の掘立小屋に渦巻いて保管していたがやがて焼かれ昇天となりました。この綱引きについては、土岐保正さんや、鎌田清さんたちは詳しく知っているようだから、いつか伺いし、て記録にとどめおきたいと思っている。

かたりべ随想

雨乞い

木下俊蔵



雨が幾日も降らず水が不足すると、農作物を干魃から守るため神様に雨を降らせてもらうためのお祭りである。

幾日も雨が降らないと、とくに小田川を用水としている農民は、田かき、田植となれば夜通し堰のとめに番をし

て、田に水を入れたものである。昔から「手前田さ水」という如く、人の心も干涸びて、我田引水となり、水争いによる喧嘩がたえず起った。

このため雨乞い祭りは村の行事となり、役場でも助成金を出して行なったものである。

堰頭たちが先頭になり、藁や人形を作る材料・酒・肴・菓子等用意し、僧侶二人と共に農民三、四十人が参加、一大行進となる。

山道は土埃りが舞ひ上り、直射日光が刺し、草が蒸れてむんむんする蒸風呂の中を歩いているようになる。当時は自動車やバイクもなく、森林軌道をてくてく歩くのみである。

会場は小田川上流の湯の沢で滝が眺められた。この藤の滝の上には山の神も祭った小さな祠があり前は少し広い空地になっていた。

一行はここで藁でインッコを作り、子どもの藁人形を作る。人形には白布を着せ、墨で目鼻を書き顔らしくする。

そして人形に名前をつける。普通は雨子、または波子などと命名する。インッコに入れた波子が死んだため、山の神の前で葬式を出し川の中に流すのだが、水がないためインッコは流れない。山の神はこの不潔な葬式のいやがらせを怒り、竜を呼び雨を降らせ、水で流してし

嘉瀬には古くから雨乞い祭りがあり、ここ最近まで続けられていた。

まうという、古老たちから生れた知恵であるう。

藁人形の波子を入れたインッコを前にして、読経が始まり、泣婆が泣き始める。

読経が終りインッコはやがて溝の下へしづしづと投げおろされ、葬式は一応終り酒宴が始まる。酒宴といつても清酒のような高価なものではなく焼酎であった。安くて酔いが早いからである。

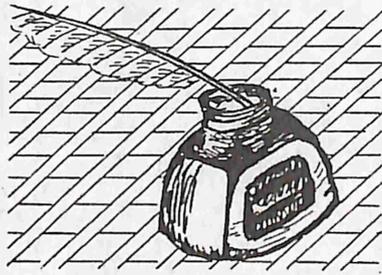
酔う程に人々は、一斉に溝の下のインッコに向って泣き始める、恥じも外聞もなく。それが滝の音と唱和してたちどころに靈感が現われてくる。

雨がぼたりと降り出す。そしてぼたりぼたりとなり、下山のする頃雨は益々強く降り、みんなずぶぬれになり乍らも、喜び勇んで帰途に着くのである。又そのとき降らなくともその夜、または二、三日には必らず雨が降るといふから不思議なことである。

かたりべ随想

穴体蛇 異聞

原田正信



中柏木磯崎神社の東側にある溜池。つまり神社の裏であるが、この溜池の西側の淵に蛇体穴があると、何度も聞かされたことがある。



溜池は苗代沢の溜池というのが公称で、当時の村人は、沢を蛇と発音して、『苗代蛇』となったものである。

この苗代沢には、昔から云い伝わってきた蛇に関する伝説があった。

萬吉なる若者が、山菜取りに行く途中、苗代沢で、文余の大蛇に出合え、恐ろしさのあまり、咄嗟の気転で、呪文をかけたなら、さしもの大蛇も、グンナリとなり、何んなく山菜の収穫を得て、家に帰ったら、大蛇に呪文をかけたが、解き忘れたことに気づき、愕然とするが、時すでに遅く、悶え苦しみながら、蛇の祟りで死んでいったということを大人から聞き、また友達どうしでも語りあったものである。

苗代沢の溜池の周囲には、溜池に覆い被さるような大木が生え繁り、昼なお薄暗い感じで、何か神秘的な情景で、大蛇の住家であった穴が、今でも残っているという話に、溜池の近くに行くとき身振いしたものである。そこはまた秋になると、あけび、栗の宝庫の場所、喰いたさのあまり、ついつい近くまで行き、ひよっと気がついて、恐さのあまり飛んで家に帰ったこともあった。

長ずるにおよんで、何故か蛇体穴のことが気にかゝり、一度穴跡を確かめたいと探してみたが、崩れ落ちて塞がったのか、あるいは始めからなかったのか、穴を発見することができなかった。

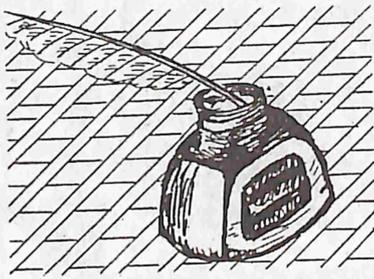
ところが、過去の出来事に関心が強いものだから、村の歴史を探っているうちに蛇体穴の真相がわかってきた。

明治の代に飯詰村岩崎の人が、何らかの伝手を求めて、苗代沢の溜

かたりべ随想

風俗習慣 のおこり

沢田政孝



池の水を利用して、密造酒を造り始めたのが、その横穴で、入口は小さく、中はかなり広い場所であったという。

今はその人の名前を知っている人もなく、大木の生え繁る深々とした場所に、蛇の怨念の伝説物語りを隠れ蓑に、世間の目から逃れて、細々と密造酒を造り、酒を売って生活の糧にしていたのだが、やがて密告によって摘発される羽目になったという。

その逆怨みがどうか今は知るすべもないが、一旧家であった家で、新築しようとして、住家の西側に積んであった材木に放火され、丸焼きの憂目にあつたと伝えられている。

こどもの頃の蛇体穴話による恐怖の感情は、今でも、穴があつたといわれる附近にさしかかると、気持のよいものでない。当時の大人が、蛇体どてという恐ろしい動物を利用、一つの教育の処世術として利用、悪童に対して、平素のおこない、山の恐ろしさを教える訓戒の言葉とし、私達悪童も、蛇体どてがいたと言うことを、素直に受けとめていたものだった。



津軽地方一帯に行われている。年中行事でも大体同じものもあれば異っているものもある。われわれの祖先は昔から世の中の平和を祈り自分達の幸福を祈って来た。それには神を祭り仏を信じ清らかな気持ちになって生活にあ

こがれた。悪魔を払って幸福を祈って来た。いま津軽に特別のものとして、ねぶた、お山参詣、獅子舞、虫送り、がある。これは皆神を祭り神をたつとんだのである。これで農村のおくゆかしい心持がわかる。昔の人々はこのようにして春を迎え秋の取入れに感謝の気持をあらわしたのである。嘉瀬では大正時代から、お山参詣、獅子舞、虫送りについて簡単にふれてみたいと思います。

獅子舞は津軽地方の舞楽であつた。太鼓、笛のはやしで踊って歩くもので、古雅なおもしろいものである。

獅子踊りについていろいろ伝えられているが、弘前市松森町から起つたものは、足利時代に京都の人で落ちぶれて津軽に乗り山水を友とし、原野を開こんでいた、此の人が古い巻ものを持ち獅子踊をしていたが、これが野元道玄によって許され広まるようになったといわれている。

嘉瀬でも大正時代から踊られていた。古町木村峰五郎さん、木村さんにも古い巻ものが現在ある。私達が見ても何が何んだかわからない。昭和の初期に踊った方々は花田粕五郎、木立照塔、木立照代道、白崎秀一、平川由光、津島治清、木立忠政等である。

現在鍛冶町の婦人達が、うけついでいる。今では各地に獅子踊りが

あるが、踊り初めは旧暦の四月頃からのところもあり、又お盆の行事としてゐるころもある。

特に見物人がある、弘前観桜会。旧九月一五日猿賀神社の祭りには今でも県内各地から獅子が集って、獅子踊りの競争が行われている。

虫送りは津軽地方一帯に行われているものである。津軽は昔から稲作について大変苦勞したことが想像される。殿様は稲作について村の代表から、その年の稲作を報告させた。稲に虫がつくの最も心配したもので、虫病気が一番恐れていた。

虫祭りは所により、又季節によって違ふ。田植が終わると藁で虫や人形を作り、笛大鼓ではやしながら村内をまわり、村端に投げすてる。又は大木に掛る。虫除けをいのつてから酒盛がはじまる。

嘉瀬では六月はじめ全村が田植が終わってから、虫祭りを、サナブリといっている。田植も共同で田植するので虫祭りには賃金を成算をして、その前の年殺された虫の供養、そして今年も虫が大発生しないよう祈り、豊作をも祈って酒盛をする。

男女の青年達が藁で大蛇のような虫の姿を作り、村の田や畑の上をまわらせてから、村の端にすてるか、大木に掛ける。それから、青年達が笛大鼓にあわせて、荒馬を先頭に、太打振り数十人が踊り、その後変装が続き遅くまで村を廻る。

現在は虫祭がなくなつた。特に五所川原では七月中旬頃、市が主催して、部落が競争して虫祭が盛んである。



かたりべ随想

移り変り

木立久二



ず水浴びをさせた所。ことに田かき時期は、泥を洗い落した馬の居場所がない程に混雑したものである。

コジャギタモデ（小栗崎田）へ出る橋の袂。畑中奴橋の袂。八幡様橋の袂。冷水から川土手のつき当り。古町シマグチ（嘉瀬タモデ西出口）の嘉瀬川（小田川）だけに五ヶ所。オオヒゲ更正橋の袂（派立）。嘉瀬溜池（清久溜池）。工藤の溜池（小学校南東側）等、数多くのマアブヒがあつたものである。

私達が嘉瀬を語る時に農業があり、農業を支えたのは馬であつたのではないか。その足跡も人々の記憶から消えようとしている。

これも、過ぎ去る嘉瀬の一駒であろうか。

